

畑 明郎著

イタイイタイ病発生源対策
50年史

イタイイタイ病は日本
の公害病認定第一号であ
り、イタイイタイ病裁判
は四大公害訴訟の先頭を
切って一九七一年原告の
被害住民が勝訴した裁判
である。そして翌年一九
七二年の控訴審判決で原
告側の完全勝訴が確定、
被告・三井金属鉱業と原
告・被害住民団体との間
で、「イタイイタイ病の
賠償に関する誓約書」
「土壌汚染問題に関する
誓約書」と「公害防止協
定」が結ばれ、これら三
つの文書が裁判後の被害
者救済と環境の再生・復
元の出発点となった。

発生源対策とはこの時
に締結された「公害防止
協定」に基づき、神岡鉬
山からイタイイタイ病の
原因となったカドミウム
等の重金属が流出しない
よう調査・監視する活動
のことである。本書は多
くの犠牲者が出た神通川
流域の被害住民らにとも
に、原因企業内部に入
り、汚染源を徹底的に調
べ上げた科学者、元大阪
市立天大学院教授・畑明

郎さんの貴重な記録であ
る。

畑さんらの調査の武器
は「公害防止協定」によ
って被害住民が勝ち取っ
た立入調査権だった。控
訴審判決直後の第一回立
入調査時、畑さんはまだ
京都大学大学院生だった
が、発生源対策の委託研
究が排水や排煙など五つ
の班に分かれて組織さ
れ、畑さんは排水班に属
した。立入調査のポイン

ラの流出物も河川を汚染
していた。立入調査を続
けていた畑さんらは神岡
鉱業所による神岡鉬山一
帯の重金属汚染がいかに
広範囲かつ深刻であるか
を知らされたが、委託研
究班発足以来五年にして
ようやく神岡鉬山におけ
る重金属汚染の発生源と
各汚染メカニズムの大略
を解明した。

として全力を注いだ。
原告勝訴後五〇年に及
ぶ発生源対策の結果、神
通川の水質はようやく自
然界の水準にまで改善さ
れ、神岡鉬山が神通川に
排出するカドミウム負荷
量は第一回立入調査時に
比較して現在は約一六分
の一に削減された。半世
紀にわたる原因企業との
問題解決へのたぐいまれ



A5判・280頁・2200円
本の泉社
978-4-7807-1823-2
TEL. 03-5810-1581

汚染源を徹底的に調べ上げた貴重な記録

住民側の視点に立ち、公害克服を進める科学者の生き方

向井 嘉之

トはまず一体どれくらい
のカドミウムが神岡鉬業
所から神通川の上流であ
る高原川へ流出している
のか、また排煙として大
気中に放散しているかを
確認することだった。さ
らに、これまでの神岡鉬
山の鉱業活動で旧廃坑・
廃滓捨場の多くが野ざら

畑さんらの公害を絶滅
するための息の長い苦闘
が始まったのはむしろこ
こからである。委託研究
班は協力科学者グループ
として再編成され、被害
住民団体は年一回の全体
立入調査のほかに、年一
〇回程度の専門立入調査
も実施してきた。畑さん
は協力科学者グループの
リーダーとして戦前から
の企業利益優先に基づき
構築された神岡鉬業所の
システムを、「絶対に再
汚染させない」という信
念のもとに、半世紀にわ
たって環境優先の工場へ
組み替えるために科学者

な努力は、確かに「日本
の公害問題解決の先進モ
デル」と述べてよい。
しかし発生源対策の到
達点はこれで終わらな
い。畑さんは「発生源対
策の今後の課題」として
豪雨や地震などの異常時
対策に最大限注意を払う
べきだと指摘する。神岡

鉬山には現在稼働中の
鹿間谷・増谷・和佐保の
三つの堆積場がある。選
鉱廃滓や沈殿物を捨てて
きた堆積場には莫大な量
のカドミウムが堆積して
いる。三つの堆積場を合
わせると五〇〇〇トン以
上のカドミウムが残ると
のことだ。実際、一九五
六年には和佐保堆積場が
集中豪雨で決壊し一萬五
〇〇〇立方メートルの廃
滓が河川に流出した歴史
がある。特に最近の豪雨
は過去に例のない、時間
雨量一〇〇ミリや連続雨
量一〇〇〇ミリを超える
集中豪雨が頻発してお
り、神岡鉬山周辺でも今
後の異常集中豪雨対策が
急がれる。また、和佐保
堆積場上流は土砂災害特
別警戒区域に指定されて
いる。

読物

文化

★はた・あきお 元大
阪市立天大学院教授・公害・
環境経済論。京都大学大
学院工学研究科金属系学
科博士課程修了。著書に
『イタイイタイ病』『金属
産業の技術と公害』『土
壌・地下水汚染』など。
一九四六年生。